天理市守目堂町

アゼクラ遺跡
発掘調査報告

1983
天　理　市
天理市教育委員会

序　　文

天理市守目堂町アゼクラ遺跡は，守目堂町老人憩の家の建設予定地で，建設工事に先立ち発掘調査を実施しました。

調査面積は 84m² にすぎなかったが，弥生時代の溝及び奈良時代から室町時代にかけての川跡（旧田村川）を検出し，当地域の遺構の一部を確認することができました。

埋蔵文化財天理教調査団が調査された，鑵子山古墳周辺の調査成果と対比，照合することにより，弥生時代の様相解明の手がかりを得られることができれば意義深いことです。

調査に当たり，関係各位より，積極的なご協力とご助言を賜わり深く感謝の意を表します。

昭和58年３月

天理市教育委員会

教育長　中　野　康　治

例　　言

1. 本報告は，天理市守目堂町159番地の1において発掘調査を実施した報告である。調査は，天理市教育委員会が行い，社会教育課・泉　武が現地を担当した。
2. 調査は，昭和58年2月7日，8日の両日に行った。現地では，木田繁子，西　利光，大口善英の各氏に協力を願った。記して謝意を表します。
3. 本報告の執筆，編集は泉　武が担当した。
4. 河道はＳＤで略称した。

目　　次

1. 調査の契機と経過……1
2. 遺跡の位置と環境……1
3. 調査の概要……2
4. 出土遺物……3
5. まとめ……4

1. 調査の契機と経過

調査地は，天理市守目堂町字アゼクラ159番地の1である。天理市福祉事務所保護課，同建設部都市計画課が各各事業地として取得した処である。

ところが当該地は，奈良県遺跡地図11B—323の隣接地にあたっているところから，事業に先立って，遺跡の有無の確認を行うため発掘調査願が出された。このため，同市教育委員会は，昭和58年2月7日，8日の両日にかけて発掘調査を行った。そして調査の結果アゼクラ遺跡と呼称する。調査地は，約300m^{2}に満たない小面積であるため，敷地中央部に，幅4mのトレンチを設定して行った。

2. 遺跡の位置と環境（図1）

アゼクラ遺跡は，市道南大路線の北側にあたり，白山神社参道の東側である。現況は畑地となっている。畑地は2筆あり，神社側と下の畑地では約1.5mの段差がある。

遺跡の周辺は，古墳時代の卓越した地域である。天理高等学校，天理大学の周辺には西山古墳，塚穴山古墳をはじめとして大型古墳が群を形成している。また，この地は布留遺跡の範囲にも含まれている。

そして，当遺跡の東約200mでは，埋蔵文化財天理教調査団により，鑵子山古墳の周辺部，守目堂池堤において発掘調査が行われた。それによると，弥生時代の溝，古墳4基，埴輪棺，小石室，古墳時代の溝，中世建物群跡などが調査された。これらのことから，アゼクラ遺跡周辺は，弥生時代から古墳時代，さらに中世における遺跡の密集地であることが考えられる。

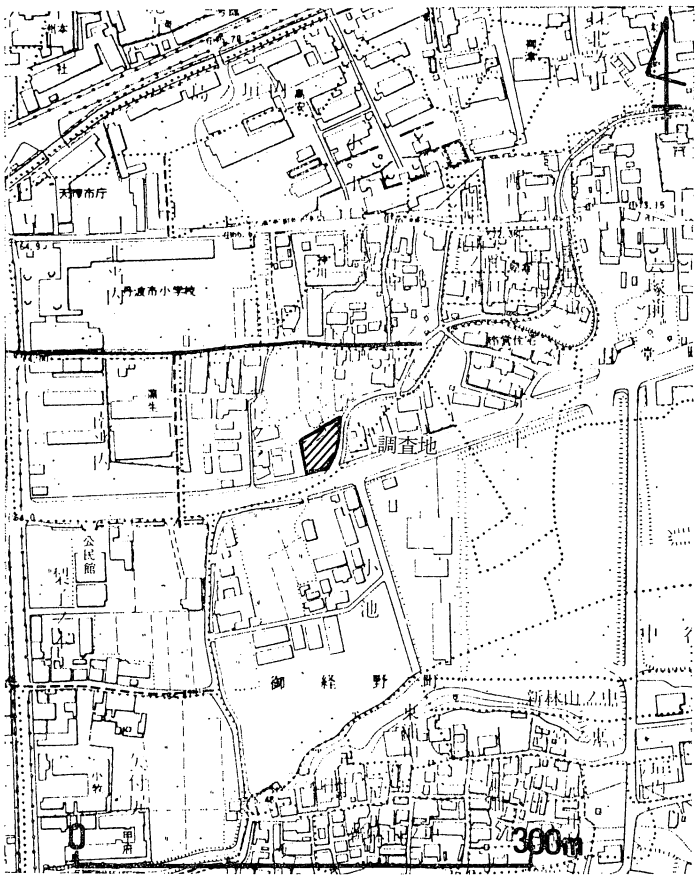


図1　発掘調査地

3. 調 査 の 概 要 (図2)

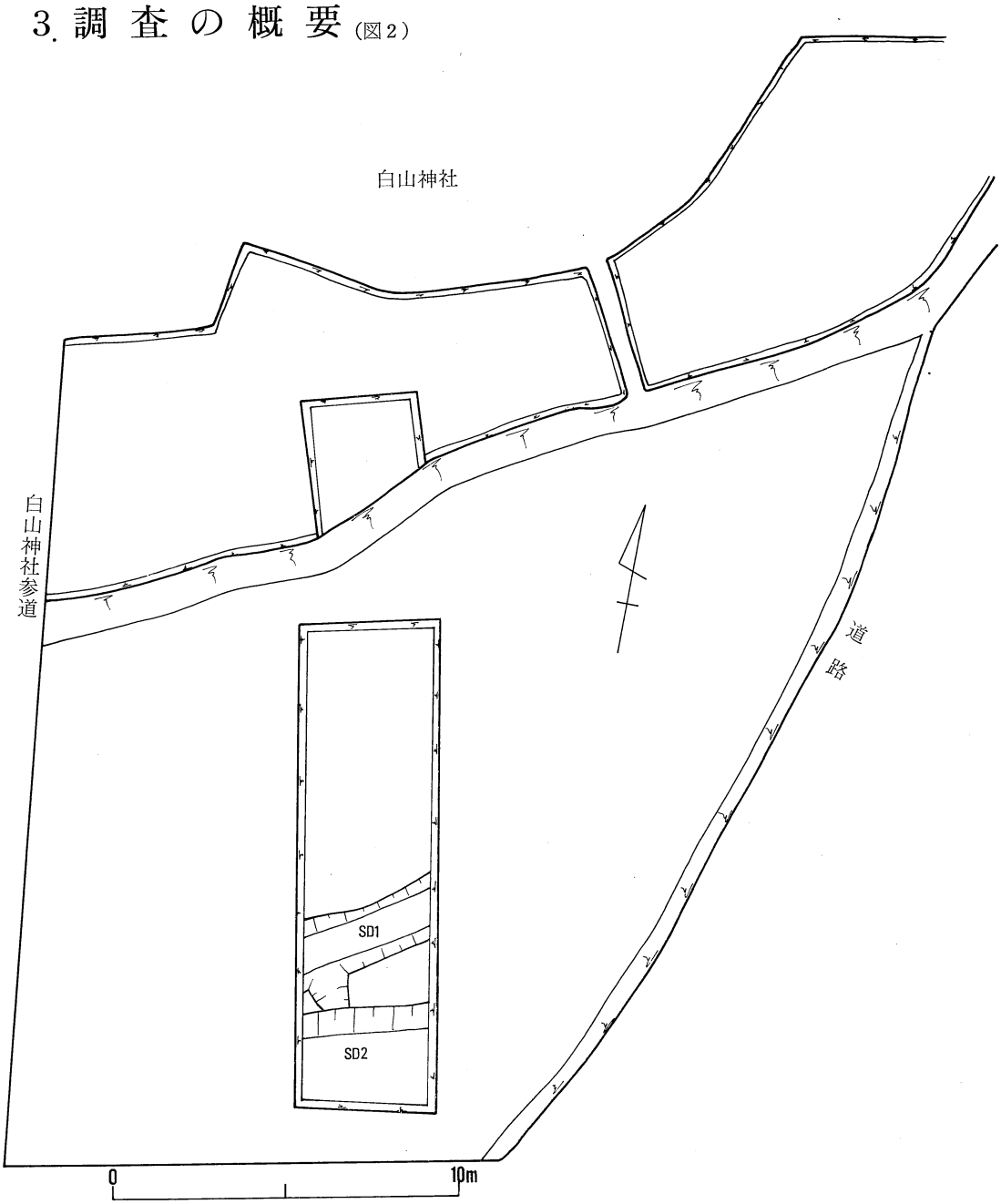


図2 遺 構 検 出 状 況

遺構の検出は，白山神社の鎮座する尾根筋が，東西方向にあるため，直角になるようにトレンチを設定した。

トレンチは，幅約4m，長さ21mである。調査の結果，上段の畑地では，耕作土を除くとただち

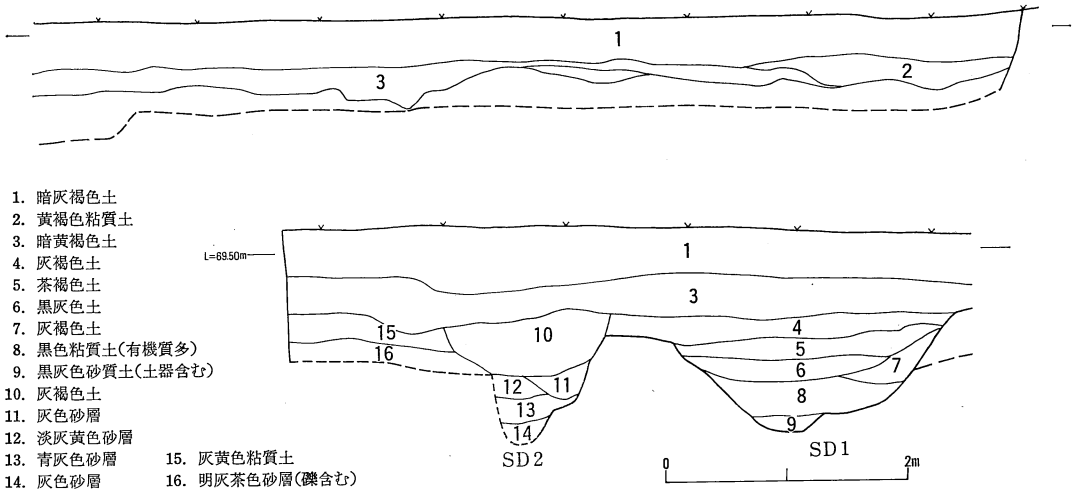


図3　西　壁　断　面　図

に地山面が露出した。以前にかなり削られているということもあり，遺構はないものと考えられる。

下段の畑地については，北から約７ｍまでの地点では，遺構は検出されなかった。南半分の調査において，弥生時代の溝（ＳＤ１）と奈良時代から室町時代にかけての河道（ＳＤ２）を検出した。

ＳＤ１は，幅約2.5ｍあり，東西方向に検出した。そして，トレンチ西端付近ではＳＤ１から流出するように南への分流を検出した。これは幅約0.8～１ｍ，深さ約30㎝である。

ＳＤ１の堆積は，５層に別れた。１，２層は灰褐色粘質土があり，３，４層では黒灰色粘質土となり，この中には，かなりの量の有機質分が含まれていた。その主なものは，木の葉，枝などである。５層は黒灰色砂質土である。（図３）

このうち土器が含まれるのは，４，５層からである。３層も含まれる可能性があるものの，出土した遺物そのものの数が少ないため将来の調査にまたねばならないだろう。

ＳＤ２は，ＳＤ１の南側にあり，北岸部分を検出した。南側については用地外となるため調査はできなかった。しかし検出分で幅約1.5ｍあり，かなり幅広い河道であることが想像できる。

河道内は，５層の堆積がみられるが，すべて砂層が堆積しており，かなりの流量があったことをうかがわせている。また，最終堆積時には，北側に幅約50㎝，深さ35㎝の溝が形成された。この溝内より，瓦器の破片が出土した。このことよりＳＤ２は中世において廃絶したものと考えられる。

4. 出　土　遺　物

ＳＤ１より13個の破片が出土した。ほとんど小破片であり図示できなかった。個体としては，高杯脚部３個，壺か甕の底部１片が主なものである。

高杯脚については，弥生後期（Ⅳ様式）のものと考えられる。また，底部破片は，表面の剝離が激しいため調整は不明である。

底部は平底である。胎土中には長石粒がかなり多く含まれている。また加工した板状木片が３片

とサヌカイト片が出土した。

ＳＤ２からは，土師器，須恵器，埴輪，瓦質土器，瓦器などが出土した。しかしこれらもすべて破片ばかりであり，復元できるものはなかった。このうち埴輪片については，円筒埴輪であり，たがは台形を呈している。縦方向の（右下り）ハケ目を１回調整している。

瓦は，平瓦の破片が２片あり，表は布目，裏は縄目である。瓦質土器は，口縁部の破片であり，端部を内側に折り込んでいる。羽釜と考えられる。

瓦器は小破片であるが，口縁部の形状からⅢ期型式に比定でき鎌倉時代後期以降と考えられる。

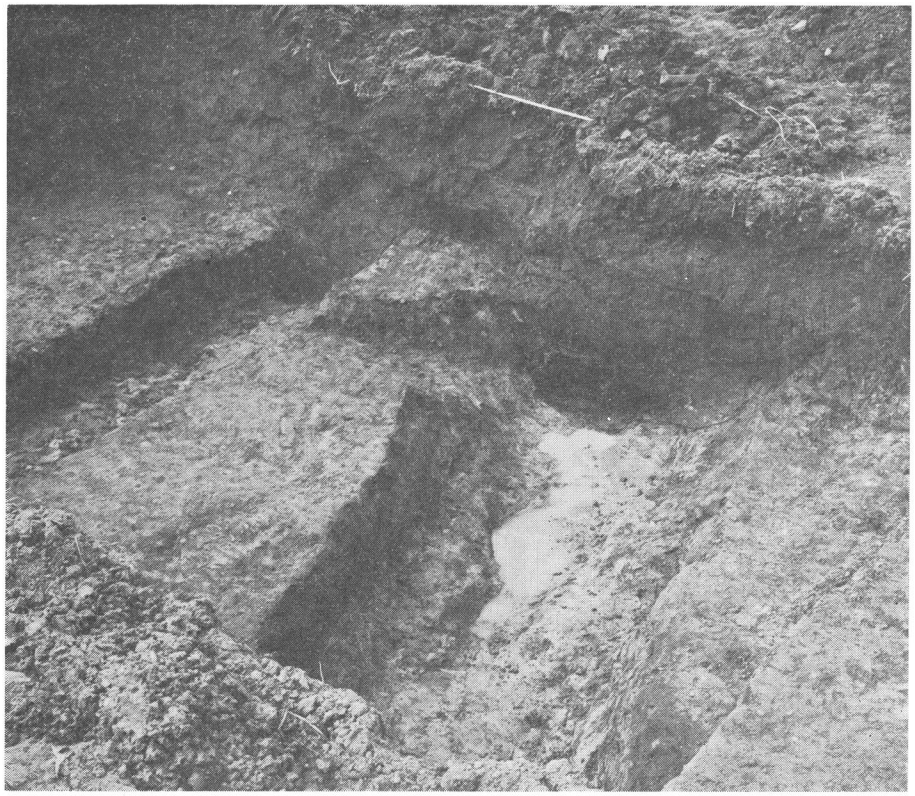
5. ま　と　め

以上調査の結果，小面積であったにもかかわらず弥生時代の溝１と，奈良時代の河道を検出した。

現地形は，１段目と２段目にかなり段差がみられるが，旧状はゆるやかな斜面であったと考えられる。

また，現在当遺跡の南側を田村川が流れており，ＳＤ２は，旧田村川であった可能性も考えられる。鑵子山古墳周辺の調査が進んでいることから，布留地域を考える際には重要な資料と考えられる。

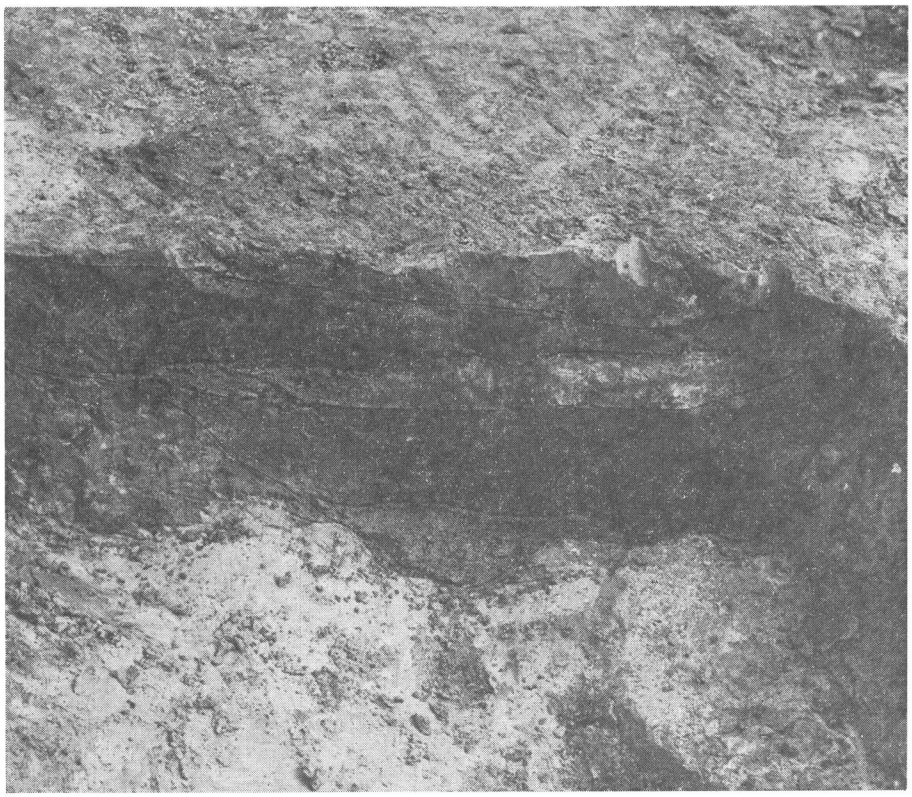
遺構検出状況



SD1・SD2

図版2

S　D　1



S　D　1　断　面

昭和58年3月31日©

天理市守目堂町

アゼクラ遺跡発掘調査報告

発行　天理市
天理市川原城町605番地

編集　天理市教育委員会
天理市川原城町132番地

印刷　天理時報社
天理市稲葉町80番地